シモーヌ・ヴェーユとデカルト〔補Ⅲ②〕
～デカルトの独自の用法とその認識論～

村　上　吉　男

筆者は，1909年パリに生まれ，自由な雰囲気の，裕福な家庭に育ち，当時の女性に開放された，教育の最高機関たる高等師範学校への先達の一人として進み[93]，また社会に出ては，教師となって生計を立てるなか，女工や農婦を体験するほか，スペイン市民戦争に従軍し，はたまたヒトラーによる，占領地域の反ユダヤ主義のもとで，アメリカへの脱出を余儀なくされ，しかしフランスの人たちが被る不幸への思い断ちがたく，祖国を真近かに感じさせるイギリスへと馳せつけるが，すでに衰弱はなはだしく，ロンドン南方アシュフォードのサナトリウムで療養につとめど，食物の拒否も災いして，ついに異郷の地にて，34歳の若さで逝った哲学者シモーヌ・ヴェーユの思想に注意を向ける者である。だがいまだそのすべてに通ずる者ではない。なぜなら筆者は，彼女の初期作品に組み入れられる，21歳のときの学士論文『デカルトにおける科学と知覚』をみるだけにとどまっているし，その表題でのデカルトについてさえ，何も知らなかったといわねばならぬからである。

だから，シモーヌ・ヴェーユのほかの多くの作品に目を通せない現状では，この学士論文における彼女の思想を探り出す以外にないわけである。そのとき筆者は，彼女が『デカルトにおける科学と知覚』で何を意図したと捉え得るか見極める必要があった。学士論文に筆者なりに注目できたのは，すでに述べ，のちにも触れる通り，彼女が表題にした，彼の〈科学と知覚〉とは何かを質すことで予想された，彼女からみる彼の認識論であったのである[94]。そこで筆者が前段に彼女を哲学者とみなし，デカルトのその認識論(的思想)と比較検討させるかぎり，彼女の思想の一も彼女の語る認識論からはじめられなければならなくなる。たとえ彼女の思想に，哲学として不可欠な存在論や実践論が窺われようとも，デカルトと同様，認識論の方が存在論や実践論より前に問題にされると推察する(このことは上記註(94)註欄参照)。

要は以上から，筆者は何よりもまず，『デカルトにおける科学と知覚』をば「デカルトにおける理性と感覚(や想像)」に見立て[95]，「デカルトにおける理性と感覚(や想像)」がいかにかかわるかの「デカルトにおける」認識論を問うべきであって，シモーヌ・ヴェーユにおける認識論は，彼の認識論を見終ったあとに解明するほかない。つまり学士論文で優先させられるは，彼女が生来の，または自らの見識による認識論をもち合わせていたといえども，筆者はそれを今明確に示すのではなしに，およそ彼女が彼の認識論を批評するのだから，まずは彼の全作品に触れて，これらに散見せずにいない認識論を明るみに出すことで，彼女の批評が妥当かどうかをこれまで確認せざるを得なかったということにある。彼の認識論が学士論文の主をなすからして，彼女は，ときに彼の認識論を彼女自らの認識論に立って，ときに彼の認識論自体を細見し，筆者が何度も指摘する通り，〈デカルトのうちに不明瞭，難点，矛盾しか見出さない〉と批評し得たわけである。

さらに筆者は，デカルトのいう認識論のなかで，繰返すが，シモーヌ・ヴェーユが洞察

したであろう，「もう一つの真理の探求」における認識論こそ，実はデカルトが「真のねらいとした認識論」であるばかりか，彼女にとって「学士論文を支えた認識論」になると読み得たし，またそう読むにしろ，筆者がなすべきは何を措いても，「もう一つの真理の探求」における認識論を，彼女自身の見識も加味された，学士論文中の彼の認識論だけでなく，彼の全作品に求めてみることを，それらから認識論に関連すると思われる事項を抽出し，かつ分析しつつ，三つの用法での各認識論を打ち立てることを筆者に課すほかなかったのである。彼の全作品を対象としたそのいくつかの原文の抽出と分析の試みはまた，彼女の学士論文を同時に読むことを課する。なぜなら筆者は，彼女が学士論文でわけても「もう一つの真理の探求」たる用法の認識論をいかにあらわそうとしたかは，彼の全作品に依拠せずには確認できない，別言すると筆者にとって，彼のいう三つの用法での各認識論を知らずして，彼女のみた三つの認識論，なかでも「もう一つの真理の探求」の認識論とこれらの批評すら語れなくなるからである（彼女の学士論文に彼の認識論が記されると断じたのは筆者であるが，そこに，彼が全作品で認識論のみを明かすのではないのと同様に，彼女の理解する彼の存在論や実践論も含まれるはいうまでもないことである）。

筆者は，シモーヌ・ヴェーユがデカルトのいう認識論のなかで，再度いうが，「独自の理性」が主になり，〈日常的用法〉の認識論での諸能力（身体や精神の感覚と想像）に関与せざるを得ない能力としての，「もう一つの真理の探求」たる用法の認識論を，彼の多くの作品に見て取ったと察知し得るからこそ，ここでもこうした認識論が彼女にあっては，「学士論文を支えた認識論」であり，彼にあっては「真のねらいとした認識論」であることをさすということができたのである（「独自の理性」は「もう一つの真理の探求」があるという証しとなった）。なぜなら，彼の多くの作品に「もう一つの真理の探求」たる用法が明示されなくば，もとより彼女はその認識論を見通し得ないどころか，彼の「真のねらい」を射抜く学士論文すら成立させ得なかったと断じられるからである。筆者は確かにこの両者に，それでもどちらかというならば彼女に，「もう一つの真理の探求」の認識論がみられることを教えられたが，しかし今は彼女のその認識論を問うのではなく，彼の多くの作品で語られようその認識論があることをこの「補Ⅲ」にて明かさねばなるまい。

しかし筆者はこれまで，デカルトのいう〈真理の探求〉や〈日常的用法〉での各認識論の理解を，まして「もう一つの真理の探求」たる用法の認識論の理解をさえ即座に得られなくなるほど，悪戦苦闘を強いられていたし，今でもこれに変わりはない。それでも何とか，筆者が彼の全作品とシモーヌ・ヴェーユの学士論文をつき合わせているうち，彼の多くの作品からする認識論への読解が可能になることもさりながら，それだけでなくして，実際彼女の学士論文に接していなければ，〈真理の探求〉や〈日常的用法〉たる各用法の認識論はともかく，「もう一つの真理の探求」の認識論がみえてくることはなかったといわねばならぬのである。とどのつまり筆者が彼のこれらの認識論を知るにあたっては，彼女の学士論文に触れずして不可能であったということである。

以上が前号[96]本文の最後の段落にて，問題として残していたこと，すなわち「筆者がデカルト認識論を質すに，なぜシモーヌ・ヴェーユなのかという，筆者にあっての両者の関係について，また彼女の学士論文の題名にもかかわらず，なぜ認識論として学士論文をみるのかなどについて」[97]と記したことに対する筆者の解答である。

だから「もう一つの真理の探求」の認識論のあることが，以下にようやくにして明かされ

ることになろう。

3.「もう一つの真理の探求」は感覚と想像をデカルトの「独自の理性」で＜考慮に入＞れる(または＜思惟する＞)ことにある

シモーヌ・ヴェーユは,『デカルトにおける科学と知覚』の第二部冒頭で次のように語りはじめる。

Ⓕ Nous sommes des vivants ; notre pensée s'accompagne de plaisir ou de peine. je suis au monde ; c'est-à-dire que je me sens dépendre de quelque chose d'étranger que je sens en retour dépendre plus ou moins de moi. Selon que je sens cette chose étrangère me soumettre ou m'être soumise, je sens plaisir ou peine. Tout ce que je nomme des objets, le ciel, les nuages, le vent, les pierres, le soleil, sont avant tout pour moi des plaisirs, en tant qu'ils me manifestent ma propre existence ; des peines, en tant que mon existence trouve en eux sa limite.[98]

わたしたちは生きものである。わたしたちの思惟は喜びや苦しみを伴っている。わたしはこの世界に存在している。つまりわたしは,わたしが外来的な何かに依存するのを感じたり,逆に外来的な何かが多少ともわたしに依存するのを感じたりするということである。この外来的な事物がわたしに従うのを感じるか,わたしが外来的な事物に従われるのを感じるかに応じて,わたしは喜びや苦しみを感じる。わたしが対象と名付けるすべてのもの,空,雲,風,石,太陽などは,これらがわたしにわたし自身の存在を明らかにするかぎり,わたしにとってとりわけ喜びであり,わたしの存在がこれらの対象に自らの限界を見出すかぎり,苦しみである。

筆者は,シモーヌ・ヴェーユがこの『デカルトにおける科学と知覚』の第二部冒頭の引用文をして,なかでも〈わたしたちの思惟は喜びや苦しみを伴っている〉という文章をして,「もう一つの真理の探求」たる用法を,その認識論を語らせてくると察知する。筆者にすれば,上記文章中の〈思惟〉が「独自の理性」のもとにある〈思惟〉となろう。それは決して,デカルトのいう〈日常的用法〉の〈自然的理性〉における〈思惟〉ではあり得ない。まして〈真理の探求〉の〈理性〉が可能にする〈思惟〉でもない。後者としての〈思惟〉はおよそ,〈喜びや苦しみ〉なる,彼のいう〈sens(身体の感覚)〉や〈sentiment(精神の感覚)〉(のちに〈sentiment〉が二つあることを明らかにする)と〈affection(感情)〉,〈émotion(情動)〉や〈passion(情念)〉を〈伴〉いはしないし,さらに引用文中の〈わたしの存在〉なる〈存在〉は彼の場合,こうした感覚と感情を取り除いた〈思惟〉によってしか成らないからである。

しからば〈わたしたちの思惟は喜びや苦しみを伴っている〉とすることが,なぜ〈日常的用法〉での〈思惟〉でないといえるのか。筆者は本稿のちの,この文章に関連せざるを得ない,デカルトの引用文の提示(次号以降)において,その〈思惟〉が「もう一つの真理の探求」の「独自の理性」の行使によるほかないことを証明する一方,ここではシモーヌ・ヴェーユの前記表題の学士論文の構成においてさえ,その〈思惟〉が〈真理の探求〉や〈日常的用法〉の各〈思惟〉にならぬのを示唆させるから,これを先きに明かすことにする。その際筆者は,

学士論文中の，〈思惟〉を発揮させる〈理性〉よりも，〈理性〉をはじめとする諸能力の作用の出所としてあり，かつ彼女が顕著なほどに使用する，ある〈精神〉という単語（の頻度）に注目して，その〈思惟〉は「もう一つの真理の探求」のある〈精神〉に属するといっておかねばならないであろう。ある〈精神〉とは，〈真理の探求〉にも用いられる〈esprit〉である（「もう一つの真理の探求」の〈esprit〉がこの〈真理の探求〉の〈esprit〉とまったく同一になるとみるかどうかも多方面にて検討される必要があろう）。だがたとえば前段に記す〈sentiment〉を〈精神の感覚〉と訳した際の〈精神〉は，彼によると〈âme〉であって，〈esprit〉ではない。だからそこで触れた通り，〈真理の探求〉の〈精神（esprit）〉にとっては，〈喜びや苦しみを伴〉わせる〈思惟〉が織り込まれる，「もう一つの真理の探求」の〈精神（esprit）〉と異なるだけでなく，〈日常的用法〉の〈精神〉たる〈âme〉とも相違せずにおれなくなるし，とくにこの〈âme〉に身体より伝えられる能力を，別言すると〈âme〉で，身体の能力（sens）のまま反射（彼女の語では既出引用文Ⓔ⑦の〈表象〉に相当）させるか，あるいは〈sens〉を〈âme〉の能力（sentiment）として新たに産出させるかの両〈感覚〉なる諸能力を，〈真理の探求〉の〈精神（esprit）〉の〈思惟〉から排除するに至るわけである。しかし果たして学士論文に〈esprit〉や〈âme〉がみられるかである。

序論・第一部・第二部・結論の四部構成の学士論文は，筆者には第一部と第二部をともに三段論法でいう「本論」にばかりか，序論を「起」，結論を「結」とする，いわゆる「起承転結」の四段論法では，第一部や第二部をそれぞれ「承」や「転」に相当させ得ると繰返すことが可能である（「転」となるは第二部にデカルトが使用しない〈sensibilité（感受性）〉が記されるからでもある）[99]。今回の拙論にて註(99)で述べた私見を確認するはもとより，そのためにはまずこの註に対し，以下を付加させることからはじめても遅くはあるまい。シモーヌ・ヴェーユの学士論文は何より，上記した四段論法に合致していると，さらに筆者のいう三つの用法の各認識論を，すなわち〈真理の探求〉，〈日常的用法〉と「もう一つの真理の探求」という各用法の認識論をすべて盛り込ませているといい得る。と同時に彼女にとって，デカルトの各認識論を語らせる「精神」なる単語がいかに使用されるかを読み取らねばならぬということになる。

「起」たる序論はとりわけシモーヌ・ヴェーユの場合にかぎらず，問題提起の部である。彼女はそこに自ら，〈la recherche de la vérité〉[100]と書き入れるからして，デカルトの〈真理の探求〉という問題を提起する。ただしこの〈精神〉をあらわそう〈esprit〉は，序論には記されてこない。しかし筆者がすでに指摘していたように，彼女にあっても〈真理の探求〉の〈精神〉は彼の用いる〈esprit〉で表現する以外になかった[101]し，彼女は序論に，〈raison（理性）〉[102]をもって，また彼にとっては彼女のいう，〈pensée véritable（真なる思惟）〉[103]，〈pensée pure（純粋な思惟）〉[104]や〈pensée scientifique（科学的な思惟）〉[105]で代表される〈思惟〉をもって，この〈精神（esprit）〉の代わりにさせるのである。

シモーヌ・ヴェーユには，たとえば〈pensée folle（気違いじみた思惟）〉[106]としか映らなかった〈真理の探求〉の〈思惟〉[107]が，〈感覚と情念との印象に委ねられたとりとめのない思惟〉[108]にとって代わられるのは，〈l'apparition du géomètre Thalès（幾何学者タレスの出現）〉[109]から，その〈真理の探求〉の〈思惟〉を彼女の時代や今日の世界にまで蔓延せしめた，〈un second Thalès par rapport à Thalès（タレスに対して第二のタレス）〉[110]とされるデカルトの登場によってであると捉えられたはずである。それゆえこの「起」たる序論の問題を受けて，彼女

の学士論文の「承」たる第一部は，〈真理の探求〉(の〈思惟〉)を発展させる部となっていく。

筆者はすでに，シモーヌ・ヴェーユが学士論文の第一部で，デカルトの〈真理の探求〉(の〈思惟〉)に関して語るいくつかの文章を引用文にして掲げおいた[111]。ここにはそれ以外の文章が引用される。

Ⓖ Refusant donc de croire aux sens, c'est à la seule raison que Descartes se fie.[112]

デカルトは感覚を信じるのを拒んで，理性のみを頼りにする。

Ⓗ Il ne s'agit nullement pour lui (Descartes) de penser commodément, mais bien, c'est-à-dire en dirigeant la pensée comme il faut.[113] (括弧内は筆者)

デカルトにとって，都合よく思惟することではなく，正しく(bien)，すなわち思惟を正確に導きながら，思惟することが問題なのである。(括弧内は筆者)

Ⓖの〈理性のみを頼りにする〉，またⒽの〈思惟〉を〈正しく〉ないしは〈正確に導〉くという各引用文をここにあえて取り上げるだけでも，この〈理性〉や〈思惟〉は〈真理の探求〉における〈理性〉や〈思惟〉でなければならぬことが明らかになる。なぜなら〈真理の探求〉での〈理性〉たる〈思惟〉が〈正しく〉発揮されるは，Ⓗで含意されよう，いわゆる《四規則》[114](的方法)に順次従わざるを得なくなると再度指摘できるからである。そこにはだから，〈真理の探求〉の，〈思惟〉また〈思惟する〉がいかに〈感覚〉を排除させ，〈四規則〉(的方法)にかかわらねばならないかの認識論(的思想)が生じてくる。

筆者はこれまでに，デカルトにみる，〈真理の探求〉の認識論を，シモーヌ・ヴェーユの学士論文第一部の前記諸引用文の主張を踏まえながらも，まずは彼の諸作品に求めて，筆者なりに質してきたにせよ，この第一部に，彼女が序論と打って変わり，次段落の註[118]註欄に触れる通り，〈真理の探求〉を代表させる〈精神〉の単語なる〈esprit〉を多用し，明記し出したことによって，その認識論(があると)の確たる証しになし得ると指摘する以外にないのである(だから第一部に記される〈理性〉[115]または〈知性〉[116]は〈esprit〉の各能力となる)。別言すると，彼は〈精神〉の単語に〈esprit〉のほか，〈âme〉を用いるが，第一部には〈âme〉は一回[117]のみ，しかも彼女が彼の『方法序説』から転記した引用文中に使用されるのであってみれば，第一部は筆者が〈âme〉をもって捉える〈日常的用法〉をではなく，〈真理の探求〉を語っていなければならないのは，もはや間違いないということである。

ところがここに，その〈精神(esprit)〉の単語が第一部[118]ばかりでなく，それにも増して第二部[119]にさえ多用されることは，また〈esprit〉が身体の〈感覚(sens)〉や〈想像(imagination)〉と，筆者にすれば，本来〈日常的用法〉用の〈âme〉として用いられるとみるべき，精神の〈感覚(sentiment)〉や〈想像(imagination)〉といっしょに使われることは，何を示唆させるのか，しかして上記の〈感覚〉の例でいうと，〈sens〉は第一部と第二部[120]に，〈sentiment〉は第二部[121]に多く見受けられるのは，また〈sentiment〉の単語のほとんどが第二部にしか出てこないのは，第一部(の〈真理の探求〉)では，〈esprit〉の身体(の sens)との遮断によって，〈sens〉が〈esprit〉に達し伝わらなくてよい，したがって〈sens〉は〈sentiment〉にもかかわらなくなると，かつ第二部では，両〈感覚〉が記される以上，〈sens〉が〈sentiment〉とかかわる場合すらある(その〈sentiment〉はだから，〈sens〉を含んで成る)からであると分かるにしても，なぜ〈senti-

ment〉が〈esprit〉の単語とともに語られるのか，という問題が生じてくる。

とりわけ「〈esprit〉が第二部で多用される」し，そのうえ「〈sentiment〉と第二部にていっしょに使われる」とみた前段のことは，これまでの注釈をここで考慮に入れずとも，第二部それ自体がもはや〈真理の探求〉そのものとは，同時に〈日常的用法〉そのものとはいえない用法を，とどのつまりシモーヌ・ヴェーユにあっては〈新しいデカルト〉としての，筆者にあっては「もう一つの真理の探求」と主張し得る用法を明示させるだけでなしに，その認識論のあることをまさに語らせている以外になくなるのである。

前段のことはまた，学士論文の構成からも証し得る。それは，「転」たる第二部が，序論と第一部で述べてきた〈真理の探求〉という問題を，これも筆者にいわせると，「真理の探求」と呼ばれるべき「もう一つの」それへと転換せしめられねばならぬからである。〈真理の探求〉と無関係でないとされるは，前号引用文Ⓔの⑧⑨と⑪に語られるほか，先きに触れたばかりの，第一部と同じ単語の〈esprit〉を「もう一つの真理の探求」の精神に宛てがったことにあろう。だが第二部は第一部と同じ〈esprit〉を使用しつつ，なおも〈新しいデカルト〉（「もう一つの真理の探求」）がシモーヌ・ヴェーユに論じられるのだから，その〈esprit〉に関しては，〈真理の探求〉での〈esprit〉と異なる理解が必要となろう。どこが相違して捉えられるのか。

〈真理の探求〉の〈esprit〉との違いは，本稿引用文Ⓕの〈わたしたちの思惟は喜びや苦しみを伴っている〉に従うかぎり，いわずもがな，この〈思惟〉の働きを促す精神を，後述もする〈âme〉でなしに，〈esprit〉とみなしおくとともに，その〈esprit〉こそ〈喜びや苦しみ〉なる感覚または感情（情動や情念）を〈伴〉わせて把握されなくてはならないところに見出される。だが今度は筆者にとって，たとえば上記中の感覚がデカルトでは，もともと〈日常的用法〉の〈精神（âme）〉を出所とする〈sentiment〉であるにもかかわらず，〈esprit〉の〈sentiment〉になることはどう捉えてよいか問われる。

筆者は，本稿引用文Ⓕ中の前段に掲げた文章が「もう一つの真理の探求」を明示させるとの判断から，この〈esprit〉の〈思惟〉，要は理性が〈喜びや苦しみ〉なる〈sentiment〉を含ませるがゆえに，一方でその理性（思惟）を〈真理の探求〉の〈esprit〉の理性（思惟）と相違させて，デカルト「独自の理性（思惟）」とみるにしても，他方で〈新しいデカルト〉としての〈sentiment〉をばたんに〈日常的用法〉から利用する同じ能力にすぎなくなると理解せずにおれない。それはすでに述べたことでも諒解される。すなわち彼のいう三つの用法の各認識論にあって，〈日常的用法〉の認識論が他の二つのそれに各「かかわり」を有する「要（土台）」とならずに，他の二つである〈真理の探求〉や「もう一つの真理の探求」の各認識論が成立しないことに，各「かかわり」とは感覚（sens と sentiment）が〈esprit〉で排除されるか否かにあることに求められた。この「排除されるか否か」は，上記のいずれの用法でも，〈日常的用法〉における身体の〈sens〉がそれぞれの〈esprit〉に伝えられる直前まで，同じ〈動脈〉や〈神経〉を経由しなければならないし，そう見定めてしまう，〈真理の探求〉や「もう一つの真理の探求」の各〈esprit〉の方が彼において，〈sens〉や〈sentiment〉たる感覚，要は身体より優位に立つと断じられる証しでしかなくなるのである。だからシモーヌ・ヴェーユが記す前号引用文Ⓔの⑩も，それを見越したうえの，確たる三つ（の用法とその各認識論）を含んだ〈デカルト説〉にみなされねばならないわけである。

しからばシモーヌ・ヴェーユは学士論文に，〈日常的用法〉での認識論を言及していたの

であろうか。筆者は，この第二部が〈esprit〉といっしょに語られる〈日常的用法〉の認識論で埋め尽くされ，これに，つまりは身体に「もう一つの真理の探求」としての「独自の理性」がかかわって，その認識論を成り立たせると答えおく。このとき〈日常的用法〉の認識論はすでに，単独に，または独立して用いられるそれでなく，身体用の認識論たるべく，〈esprit〉の「独自の理性」と一つになって，「もう一つの真理の探求」に織り込まれるとみる。筆者はまた，彼女がデカルトに用いた〈巧みな企て〉という言葉を，第二部までのこうした構成にそのまま当てはめ得るといいたいし，さらに〈日常的用法〉の認識論がたとえば序論中の，すでに註(108)に引用した〈感覚と情念との印象に委ねられた思惟〉と，第一部中の，前号引用文Ⓔ⑦の〈混沌のようなものから始まり，すべてが表象と運動によって調節される，別の(事柄の)世界〉との語句で暗示され，これらが本稿引用文Ⓕの〈わたしたちの思惟は喜びや苦しみを伴っている〉からはじまる第二部に受け継がれるよう配慮されると指摘できるが，しかし第二部冒頭に記されたこの〈喜びや苦しみ〉はおよそ，序論や第一部での上記語句でいう，〈表象と運動〉としての身体の〈sens(感覚)〉を，または〈精神(âme)〉の〈sentiment(感覚)〉を示して単独で使用される〈日常的用法〉には含まれないと繰返しおく。

筆者が前段で序論と第一部より抜き出した語句は〈日常的用法〉の認識論に与するのであってみれば，これに一見類したのが，本稿引用文Ⓕのかの冒頭文章かと疑われても何んら不思議ではなかろう。だが再度確認するが，その〈喜びや苦しみ〉なる〈感覚(sentiment)〉は，〈esprit〉にて表象されねばならぬ，〈新しいデカルト〉のために役立つ能力でしかない。そう判断せずには，シモーヌ・ヴェーユが，一に，〈真理の探求〉の〈esprit〉に無関係な身体の〈sens〉やその〈sentiment〉を，要は各能力を中心に据える〈日常的用法〉の認識論を，序論や第一部でのあの各語句を除けば，また〈真理の探求〉の認識論と比べれば，ほとんど記さぬはまだしも，どうして〈esprit〉の多く書き込まれた，〈新しいデカルト〉の第二部で，あのように長々と語り続ける必要があるといえるのか，そして一に，第二部の認識論が〈日常的用法〉で彩られるとされるならば，その精神の単語〈âme〉が〈esprit〉と頻度にて比較するに，少ないのはなぜか，あわせて〈真理の探求〉や〈日常的用法〉でもないという第二部は，もしくは前号引用文Ⓔの⑧⑨と⑪は，いったい何のために記されることになったのか，に誰一人答え得ないのではなかろうか。そうなのである。以上のすべてに対する答えは「もう一つの真理の探求」で明かされるにあったのである。

また前記していた問い，「なぜ〈sentiment〉が〈esprit〉の単語とともに語られるのか」の答えは，第二部冒頭に掲げた例の文章より導き出せる。すなわちデカルトにおいては，〈喜びや苦しみ〉が身体の〈sens〉でなしに，〈esprit〉の〈sentment〉として受け取られるは，この〈sens〉に〈esprit〉の〈sentir(感じる)〉が働きかけて，その〈esprit〉が〈sentiment〉を表出させるのであって，身体の〈sens〉が〈esprit〉に〈喜びや苦しみ〉に変わりなく伝えられるにせよ，身体の〈sens〉自身でそれぞれを〈喜びや苦しみ〉と名付けることは当然不可能である(〈喜びや苦しみ〉という各命名は，〈sentiment〉の産(表)出と同時に働く，〈日常的用法〉では〈自然的理性〉による〈思惟〉に依存する。だからここからも，〈思惟〉は〈感覚〉にかかわるし，そうした〈esprit〉が「もう一つの真理の探求」にはあるとされるわけである)。

そして第二部には，デカルトのいう〈日常的用法〉で使用される〈âme〉の単語が，〈mon âme(わたしの精神)〉(122)や〈l'union de l'âme et du monde(精神と世界の結合)〉(123)の二箇所の表記となってあるだけがゆえに，第二部は〈日常的用法〉自体を語りはしないのである。〈日常的

用法〉での〈âme〉の在りかを，彼は〈脳〉すなわち身体ともみているから，〈sens〉や〈喜びや苦しみ〉の各〈sentiment〉は，〈心臓〉や〈脳〉を中核にし，「求心的」に「遠心的」に全身体をかけめぐる能力になる。彼はこの〈sens〉や各〈sentiment〉にはじまり（そのほかに身体と〈âme〉の各〈imagination〉を該当させていた），〈自然的理性〉までも含めた〈日常的用法〉の認識論を身体用の諸能力として，〈esprit〉に組み入れさせ，そこに「独自の理性」が働きかけんとする「もう一つの真理の探求」の認識論を導出する。この〈新しいデカルト〉たる用法においてさえ，上記した各〈sentiment〉は身体の〈sens〉の〈esprit〉への受容なしに，〈esprit〉に表出してこない，別言すると〈sentiment〉は身体の〈sens〉によって〈esprit〉で成るから，身体と〈esprit〉が関係せずにおれなくなるということである。

そこで以上から，新たに〈日常的用法〉と「もう一つの真理の探求」の，また前者の精神の〈âme〉と後者の精神の〈esprit〉の相違はどこにあるかが問われる。身体の〈sens〉が各精神に受け入れられるは，各用法に共通するとなれば，その違いは精神という各単語が何を語るかに求めるしかないであろう。本稿引用文Ⓕ中の語句〈外来的な事物〉を例にいうと，筆者は〈外来的な事物〉が，一に〈日常的用法〉の〈精神（âme）〉に受容された際，〈âme〉はそれ自身〈脳（身体）〉でさえあるからして，〈外来的な事物〉を〈âme〉のではなく，身体の「外来像」とするし，一に「もう一つの真理の探求」の〈精神（esprit）〉に受容された際，〈esprit〉はそれ自身〈脳〉とは無関係であるからして，〈外来的な事物〉を身体のではなく，〈esprit〉の〈外来観念〉とするのであってみれば，まさにデカルトにとって，〈外来的な事物〉が各精神にいかにかかわるか，要するに各精神が〈外来的な事物〉によって，それぞれ順次身体に，精神にみられるかに，その相違があろうと理解する[124]。

さて筆者がこれまで，ことさら〈sens〉や〈sentiment〉にこだわって語り続けてきたのは，シモーヌ・ヴェーユが学士論文に，前記の通り，デカルトの用いたその〈sens〉や〈sentiment〉を書き入れていたと指摘できるほか，彼において一度の使用も目に留まらない，ときに上記能力の両方を含意させる〈sensation〉[125]でもって代用したり，ときに上記能力に類しよう単語であろうが，それでもこれらと同意とはいえない〈sensibilité〉[126]を散見させたりするのをみるにつけては，筆者はこの〈sensation〉や〈sensibilité〉から，何を予想し得るかを彼女に質す必要があるからである。その最たる予想とは，学士論文中の第二部に，〈sensation〉や〈sensibilité〉が他の部より多く記されることで，第二部は彼女をして，彼が周知されるのを望んでいたであろう〈新しいデカルト（「もう一つの真理の探求」）〉なる認識論をだけではなく，そこに彼女自らが理想とする認識論を織り込ませて語らしめられることにある。

しからばシモーヌ・ヴェーユは，〈sensation〉や〈sensibilité〉を第二部に多く記したがゆえに，「もう一つの真理の探求」の認識論に組み入れられる諸能力として用いたのか。一見そのようにも捉え得る。だが前記を想起すれば，すなわち第二部が，「〈sens〉や（喜びや苦しみの）各〈sentiment〉にはじまり，〈自然的理性〉までも含めた〈日常的用法〉の認識論を身体用の諸能力として，〈esprit〉に組み込まさせ，そこに「独自の理性」が働きかけんとする「もう一つの真理の探求」の認識論を導出する」部であると述べたなかでの，「身体用の諸能力」中の〈sens〉に注目すれば，〈sensation〉や〈sensibilité〉が別段「もう一つの真理の探求」用の諸能力に使用されるであろうと理解せずともよくなるのである。それに彼女自らが志向する認識論は，その有り様を身体の〈sens〉のような〈sensation〉に，また〈sens〉や〈sensation〉とは

異なるが，身体の能力には違いがない〈sensibilité〉にあると見て取るならば，これらも含まれて成る，彼女独自の認識論である（ここではその認識論の分析が目的ではない）といい得るのであって，「もう一つの真理の探求」の，単独の用法として取り上げ得る〈日常的用法〉の，ましてや〈真理の探求〉のいかなる認識論にすら従う必要がなくなるであろう。

とはいえ，上記の三つの〈デカルト説〉なる各認識論のうちで，もっとも身体の能力を語るに関連する認識論はデカルトにおいて，〈sens〉や〈sentiment〉を容認せずにおかない〈日常的用法〉に属すのであってみれば，シモーヌ・ヴェーユが主張する身体の能力の〈sensation（感覚）〉や〈sensibilité（感受性）〉から成ろう認識論をも，彼のいう〈日常的用法〉の認識論にかさねあわせてみるという判断は，一概に否定されるべきでなかろう。第二部は何せ，「もう一つの真理の探求」が記されるといえども，その「独自の理性」が〈日常的用法〉の認識論でいう，〈sens〉や〈sentiment〉をはじめとする諸能力に働きかけると指摘できたし，彼女がとりわけて〈sensibilité〉と〈sensibilité passive（受動的感受性）〉をそれぞれ，〈sens〉と〈sentiment〉に置き換えると，その〈日常的用法〉の認識論で語られるのと等しいことが，後述する〈感受性〉や〈受動的感受性〉への注釈の試みで明らかにされるからである。

だがその前に，〈sensation〉のことをさらに明確にしておかないと，どうして〈sens〉や〈sentiment〉が〈sensibilité（感受性）〉や〈sensibilité passive（受動的感受性）〉に取って代わられるかさえ見分け得なくなる。そこでまずは，次のことが前記で確認された。すなわち，シモーヌ・ヴェーユのいう〈sensation〉には，デカルトのいう〈sens〉と〈sentiment〉が含まれて使用されると。それは註(125)註欄に記したように，〈sensation〉のほとんどが複数形で，しかもこれに従う複数定冠詞付きで用いられているからである。こうした複数形や定冠詞表記は〈感覚〉のしかるべき種類のすべてをさすのでなければならぬし，たんに〈sens〉か，〈sentiment〉のいずれかだけの複数形を示すは他方が不問にさらされるからして，不可能であるといわねばならない。すべての〈感覚〉とは第二部において，身体の〈sens〉が〈日常的用法〉や「もう一つの真理の探求」のそれぞれでいう〈âme〉や〈esprit〉の精神にあって，そのまま反射（表象）したり，身体の〈sens〉がこの〈âme〉や〈esprit〉におのおの同じように伝えられ，各精神で〈sentir〉の働きかけを受けて異なる〈sentiment〉を表出（表象）したりすることを含意させ語られる諸能力なのである。

筆者はまた，デカルトのいう，身体の〈sens〉を「外的 sens」や「内的 sens」と，〈sentiment〉を「能動的 sentiment」と「受動的 sentiment」とに分けて捉えてきた(125)。ではシモーヌ・ヴェーユは，彼の上記の用語に対して，いかにいうか。彼女はたとえば，ときに〈les impressions des sens（感覚の諸印象）〉(128)と，ときに〈je saisis l'étendue elle-même en mes sensations（わたしはわたしの感覚のうちで延長そのものを理解する）〉(129)と記すように，身体の〈sens〉や〈sentiment〉を活用させる。〈sentiment〉に充当するはもとより，〈impressions〉や〈sensations〉である。各単語は〈印象〉や〈感覚〉を複数回有する意味にすぎないが，それでもその〈sens〉をもってしたり，〈sensation（感覚）〉して〈延長（事物）を理解〉したりする，彼のいう〈日常的用法〉の〈âme〉や「もう一つの真理の探求」の〈esprit〉の各精神の一能力たる〈sentiment〉でしかないと同時に，もしや〈les impressions des sens〉は各精神にての〈sens〉のままでの〈諸印象〉であるかもしれぬように受け取られてくる。それはともかくも，〈impressions〉や〈sensations〉は少なからず，身体の〈sens〉なしには，精神（âme や esprit）でのその〈sentiment〉を生じさせないし，かつこの〈sens〉と〈sentiment〉をかねるからこそ，そこに複数の意味が生まれるとい

えるわけである。

さらに，ここにきては，筆者が外的感覚器官(五官)での，また内的器官(内臓)での身体内外の〈sens〉が精神(âme や esprit)の〈sentiment〉の成立因子になるとみた，デカルトのいうこの〈sentiment〉を，あるいは筆者のいう「能動的 sentiment」を，今度はシモーヌ・ヴェーユが〈sensation〉で表現するばかりか，これ以外に，まるでその〈sensation〉にあわせ記入されるかのごとくに，〈sensibilité〉を書き入れるのは，当の〈sensation〉と同様，なぜなのかをもはや繰返すだけにとどまらず，答えを出さなくてはなるまい。彼女の生きていた時代の用語としての，〈sensation〉は「感覚」の，〈sentiment〉は「感情」の意を第一義に掲げられるのが一般的である[130]とされるから，彼女は〈sensation〉を彼の時代に使われた〈sentiment(感覚)〉なる用語に当てはめざるを得なかったし，そのうえ〈sensation(感覚)〉に身体の〈sens(感覚)〉さえ含ませておかなくてはならなくなろう。これと同様の理解になくてならぬのは，筆者のいう「能動的 sentiment(感覚)」である。だから「能動的 sentiment」も「感情」の意を示唆させることはない。「感情」の語に対しては，彼は〈affection〉[131]を使用することになる。以上は彼女がなぜ〈sensation〉を持ち出したかへの答えである。他方〈sensibilité〉に関しては，次なる引用文がそのなぜに答えてくれるであろう。

Ⓘ Les sensations ne contiennent ni une matière, ni un espace, ni un temps, et ne peuvent rien nous donner en dehors d'elles-mêmes, et en quelque sorte elles ne sont rien. Cependant nous percevons le monde ; c'est donc que ce qui nous est donné, ce n'est pas seulement les sensations.[132]

感覚は質料，空間，時間も含まず，それ自体以外わたしたちに何ももたらし得ず，いわば何ものでもない。しかしながら，わたしたちが世界を知覚することは，わたしたちにもたらされるものがたんに感覚だけではないということである。

筆者は，教師シモーヌ・ヴェーユの授業で成ったノート『哲学講義』[133]からの上記引用文を今回で三度持ち出す[134]が，しかしこれが今回ほど，〈感覚だけではない〉能力に〈sensibilité(感受性)〉を妥当させるに適した文章でしかないことを知り得ない。換言すると〈わたしたちにもたらされるもの(能力)〉が，デカルトのいう身体の〈sens〉や精神の〈sentiment〉と同意に用いる，彼女のいう〈sensations(感覚)だけではない〉とするならば，それにはもはや〈感受性〉を宛てがうほかなくなるということである。なぜなら彼女がそこでさらに，〈Dans la connaissance en général, les apparences sont données par la sensibilité...(認識一般において，外観は感受性によってもたらされる...)〉[135]と主張する以上，〈感覚〉と同時に語られねばならぬのが〈感受性〉であるといえるからである。

逆にいうと，シモーヌ・ヴェーユは引用文Ⓘで，身体や精神の〈感覚(sensations)〉を彼女の認識論から抹殺し排除しようと意図させるのではない。デカルトが〈感覚(sens や sentiment)〉をかの〈真理の探求〉で〈信用しない〉[136]として排除するのに比べ，あるいは他の〈日常的用法〉や「もう一つの真理の探求」でそれぞれ〈考慮〉するのに比べ，彼女にとっては，こうした〈感覚(sensations)〉が〈何ものでもない〉にとどまるだけなのである。だが〈何ものでもない〉もこの「排除」や〈考慮〉するを示すにすぎないのか。否である。たとえば註(135)の

〈apparence(外観)〉を引用文Ⓕの語句〈chose étrangère(外来的な事物)〉に置き換えて，Ⓘの〈感覚〉に関与させるならば，〈感覚〉が〈質料，空間，時間を含まず〉と彼女に断じられるは〈感覚〉がなるほど，〈質料〉すなわち〈外来的な事物〉そのものを身体や精神に持ち込めずにいることであり，したがってその〈外来的な事物〉の〈空間〉や〈時間〉を問えないことになるにしても，彼女が続けて〈感覚〉は〈それ自体以外…もたらし得〉ないと記すことでは，否というほかない。むろんⒾのここでの文脈にあっては，〈それ自体以外〉も〈何ものでもない〉に適当しようが，それでも〈それ自体〉が何をさすか見極めずに，〈何ものでもない〉といえない，要は彼女にとって，その何をも〈何ものでも〉なくなることでいう〈何ものでもない〉にさせなくてはならないのである。

そこで筆者は，〈(感覚)それ自体〉とは何かを知るべく，次の引用文を参照する。

Ⓙ Ce que nous pouvons dire sur l'exercice des sens en dehors du mouvement, c'est que nous avons des sensations d'une variété infinie et qui nous apprennent rien du tout.

LE SENS DU MOUVEMENT

Le mouvement nous procure toujours des sensations de l'ordre du toucher, de cœnesthésie, de douleur, qui impliquent un changement. Mais le changement est qualitatif, le mouvement est quantitatif.[137]

わたしたちが運動と関係しない感官の働きに対していい得ることは，わたしたちがわたしたちにまったく何も教えはしない感覚を，無限な変化に富む感覚を有するということである。

運動の感官(運動と関係する感官)

運動はたえずわたしたちに，ひとつの変化を引き起こす，およそ触覚，体性感覚(温度や筋・関節感覚)，痛覚ほどの感覚を与えてくれる。しかしその変化は質的であり，運動というもの自体は量的である。(括弧内は筆者)

筆者は上記引用文Ⓙに，現代の生理学でいう「閾値(threshold)」[138]の知見に匹敵する，シモーヌ・ヴェーユの見識が盛り込まれていると読む。別言するとⒿは，たとえばデカルトなどにも立脚しない，彼女独自の見方によるというほかなく，筆者にすれば，彼女が「閾値」を哲学的に証明し得た引用文になろうと察知されるのである。だからまずはⒿの注釈を試み，そのうえで，今問題にしている〈(感覚)それ自体〉とは何かに答えることにするが，しかし何かは注釈のなかで，おのずと導き出されると見通すことができよう。「閾値」は一「ニューロン(神経細胞)」と一「シナプス」の関係にあって，後者に受容された「神経伝達物質」が前者に伝わる「値」または「量」をさすとされる。筆者はこの伝達が何より〈運動〉中の〈運動〉となり，一「ニューロン」から出ては次なる「シナプス」と「ニューロン」への関係を生み出していくと捉える。

するとシモーヌ・ヴェーユの記す〈運動〉中の〈運動と関係しない感官〉の場合，〈感官（ここは内外の感覚器官とみなす）〉が「神経細胞」をはじめとする幾種かの無数の細胞で組織されることでは，一〈感官〉内の一「シナプス」で引用文Ⓕの〈外来的な事物〉を受容しても，〈外来的な事物〉たる「神経伝達物質」をこの「シナプス」と関連する一「ニューロン」に伝えることができなくなる。彼女がいわば「シナプス」にとどまろう「神経伝達物質」を一早く，〈何も教えはしない感覚〉や〈無限な変化に富む感覚〉と表現するは，〈感官〉をかたちづくる「シナプス」にこうした〈感覚〉がそれとしてもたらされるとの見方に基づくのであろうが，それでもこうした〈感覚〉が〈無限な変化に富む〉ようなとらえどころのない感覚を意味させては，結局〈わたしたちにまったく何も教えない感覚〉にしかならないのである。極論していうと，これは次段落での注釈通り，のちに〈ひとつの変化を引き起こす〉ことになるにもかかわらず，引用文Ⓘの〈何ものでもない〉感覚さえ生じさせはしないということである。

だが〈運動〉中の〈運動と関係する感官〉の場合，この〈感官〉は「閾値」を超えんとする〈運動〉中の〈運動〉にかかわるために，〈外来的な事物〉たる「神経伝達物質」すなわち〈感覚〉が一「シナプス」から，これと関連する一「ニューロン」へと，しかもシモーヌ・ヴェーユに語らせよう，〈ひとつの変化を引き起こ〉させた〈触覚，体性感覚，痛覚〉のいずれかとしてその都度の伝達を可能にする〈感官〉となる。「神経伝達物質」がはじめてといってよいほど，〈無限な変化に富む感覚〉のなかから，〈運動〉中の〈運動〉を介して〈ひとつの変化〉を明瞭に遂げた〈感覚〉を生じさせるのもこの〈感官〉である。そして引用文のⒿの〈運動の感官〉以下の，〈その変化〉という〈運動〉中の〈運動の変化〉は〈質的であ〉るとの文脈に従えば，〈質的であ〉るのは彼女ばかりでなく，誰しもがいうであろう〈感覚〉であるほかない。たとえば〈触覚，体性感覚，痛覚〉はそれぞれ変化をみせたがゆえに，こうした〈質的〉な違いを有する各〈感覚〉となるし，いかなる〈感覚〉も〈質的〉であるから，〈感覚〉に引用文Ⓘに記されよう〈空間，時間も含ま〉ないにちがいない。そしてまたこの〈質的であ〉ることがもはやいうまでもなかろう，〈（感覚）それ自体〉とは何かへの答えでしかなくなるのである。

と同時に，引用文Ⓙからも〈sensations〉以外に，シモーヌ・ヴェーユの認識論には〈sensibilité（感受性）〉がなければならぬことが証明される。引用文Ⓘの〈わたしたちにもたらされるものがたんに感覚だけではない〉に対して〈感受性〉を充当させてきた筆者は，Ⓙの〈運動というもの自体は量的である〉に対しても，この〈le mouvement〉に〈感受性〉を持ち出し当てはめなければ，その今までの注釈はどころか，彼女が『デカルトにおける科学と知覚』の学士論文に書き入れる〈感受性〉はいったい何んであったのか，明らかにできなくなる。およそ学士論文の認識論的主張の延長線上にあろう『哲学講義』にみえるからこそ，ⒾとⒿに予想され得る能力には，もはや〈感受性〉しか見当たらない，逆にいうと学士論文から彼女に見据えられていた〈感受性〉であるがゆえに，〈感受性〉が『哲学講義』で語られたⒾとⒿに付加されると指摘できても不思議ではなかろう。それはしかし，〈感受性〉が彼女独自の見識に基づくかぎりは，教育上適切さを欠くのであり，ⒾとⒿの通り暗示されるにとどまるほかなかったといえるのである。

それでもⒿの〈運動というもの自体は量的である〉ことこそ，〈sensibilité（感受性）〉に当てはまると読み取らねばならなくなる。ただしここで注意すべきことがある。上記引用の〈運動というもの自体〉とはあらゆる〈運動〉をさし，筆者がこれまで「〈運動〉中の〈運動〉」と記した際の前者の言葉に合致する。後者の〈運動〉は「閾値」にかかわり，「閾値」を超えての

伝達を表現することにあった。なぜかは，註(135)の〈外観は感受性によってもたらされる〉も，また同様に〈外来的な事物〉たる「神経伝達物質」が一「シナプス」に受け入れられるも，これが〈感受性〉なる前者の〈運動〉でなければならず，かつこの〈感受性〉さえ「閾値」を超える〈運動〉に従わざるを得なくなるからである。

そこで前者でいう〈運動〉での〈外観（外来的な事物）〉たる「神経伝達物質」すなわち〈感覚〉や〈感受性〉はそれぞれ，シモーヌ・ヴェーユをして，後者でいう「閾値」を超える〈運動〉においてどうなるといわせたのかである。それはいわずと知れたこと，「閾値」を超える〈運動〉によって〈変化〉するのが〈感覚〉であり，前者や後者のあらゆる〈運動〉でも〈変化〉しないのが〈感受性〉であるとみることにある。その〈感受性〉は〈量的である〉。とどのつまり〈感受性〉は受容される前者の〈運動〉でも，「閾値」を超える後者の〈運動〉でも，たえず〈量的〉のままで伝えられるということになる。だから〈質的〉に対して〈感覚〉と答える以上，一方の〈量的〉に呼応しよう能力を見出さずには片手落ちにしかならないのであって，筆者はこれに〈感受性〉を該当せしめ[139]，もって彼女の認識論の「認識の起こり」の能力には，〈何ものでもない〉〈感覚〉と〈感受性〉との二つが設定されていると繰返してでもいっておきたかったのである。

学士論文『デカルトにおける科学と知覚』に記される〈sensibilité（感受性）〉は，註(126)註欄でまとめおいたように，定冠詞付きで一回，無冠詞で三回（うち同格使用で一回）にわたり，つねに単数形で表記される。これは部分冠詞を付さずとも，〈感受性〉が「量」にかかわる，いや「量」であることを示すからである。また註(135)の引用文を持ち出して再度指摘するように，シモーヌ・ヴェーユがそこに，〈外観（外来的な事物）は感受性によってもたらされる〉と書くのは，〈感受性〉が引用文Ⓙに従うかぎり，「量」となって，精神に直接受容されるよりも，まずは身体の〈感官（〈感覚〉と共有しよう内外の感覚器官）〉に受け入れられて生じる身体の〈感受性〉を示唆させるからである。ここから筆者は，彼女が引用文Ⓕで〈わたしたちは生きものである〉や，既出引用文Ⓔ⑦で〈わたしたちが生きている世界の事柄への正しい考え〉と語るなかで，なぜことさらに〈vivants（生きもの）〉と〈vivre（生きる）〉を書き入れ表現したかを知り得る。たとえば精神〈esprit や âme〉だけを重んじ，すべてに優先させるデカルト的人間は彼女にとって，〈vivant〉でないし，〈vivre〉ことになりはしない。

シモーヌ・ヴェーユは引用文Ⓕや既出引用文Ⓔ⑦での〈vivre（生きる）〉〈vivant（生きもの）としての人間には身体を，とどのつまり〈感受性〉を欠いて存在しないことを強調するのであり，この身体なくして精神もないとする立場は，高等師範学校在籍当時の先輩モーリス・メルロ＝ポンティ[140]のよって立つ思想に通じてこよう。しかし筆者にとって，身体に立脚しよう思想が彼女のその特異な〈感受性〉をもって展開しては，彼の思想，たとえば彼が与させられる実存主義的な思想とも相違するといわざるを得なくさせる[141]。だがここではそれよりか，デカルトを批評する，わけても引用文Ⓕにおいて，この〈感受性〉なる用語を当のデカルトに見出せるのかを，そのうえで彼女が学士論文第二部に〈感受性〉を書き込むことで，なぜデカルトを語り得るかを確かめてみることが必要となる。まず前者について指摘し得るは，〈sensibilité〉の合成語〈insensibilité〉[142]を除いて，〈sensibilité（感受性）〉を用いた形跡は，彼のいかなる作品にも見当たらないということである。

だがデカルトの全作品中に〈sensibilité（感受性）〉なる語が見出せない一方で，シモーヌ・ヴェーユが，彼の三つにわたる認識論的思想を，なかでも学士論文第二部にて，彼がその

「真のねらい」と見定めたと察知できる「もう一つの真理の探求」の認識論を看破し，解明せんとする試みに，前記した引用文Ⓘや㋙の第二部への関連をここで考慮せずとも，〈感受性〉を書き入れたは，何かなのである。筆者はこれに対し，まず，〈感受性〉が記されることはそれだけで，彼女独自の認識論を語ることになると，だから第二部は当の〈感受性〉によって，彼女のいう認識論を，彼のかの認識論と同時に成立させるごとくに見紛うほどであると，そして，〈感受性〉の導入は既出引用文Ⓔ⑥にいう〈デカルトらしき巧みな企てをまねる〉に倣い対抗した感のある，持論組立上の「巧妙」さによると，だから〈感受性〉は彼の用語である諸能力との入り換えを可能にしていなければならないとみる。

そこで筆者は前段でのことを，〈sensibilité（感受性）〉がデカルトの用語である諸能力に置換されると断じておく。こうした入れ換えが許されると判断せずに，学士論文第二部でシモーヌ・ヴェーユは〈新しいデカルト〉すなわち「もう一つの真理の探求」の認識論を描けないどころが，彼女による「巧妙」さのゆえんも見当たらなくさせ，それこそ学士論文そのものが，少なからずその第二部自体が彼の認識論的思想をさしていった〈不明瞭，難点，矛盾〉を彼女本人のそれに当てはめざるを得なくするのである。彼は〈感覚〉たる用語として，身体の〈sens〉と精神〈âme〉の〈sentiment〉を用いていた。彼女はこれらの語を使用しないで，しかし各語をさし，また各語をともに含ませる〈sensation（s）〉で各語に対応していた。だが彼女にあって，〈sens〉や〈sentiment〉にしろ，〈sensation（s）〉にしろ，それらは彼に語られよう〈真理の探求〉，〈日常的用法〉と「もう一つの真理の探求」の各認識論においてさえ，繰返しいうが，〈何ものでもない〉ためになくてかまわぬ諸能力であり，あるとみられるときでも，彼のような三用法の各認識論をではなく，一なる認識論しか持ちあわせ得ない彼女独自のそのもとでは，〈感覚〉が世間で認知されている慣例に従って，たんに付け足された諸能力となるにすぎないのである。だから彼女は「認識の起こり」として，①の〈質〉以外，〈わたしたちに何ももたら〉さない，㋙の〈何も教えはしない〉効力なしの〈感覚〉のほかに，〈量〉である〈感受性〉を一方に配置させていたわけである。むろんここは前記した通り，彼女独自の認識論の言及の場でないにしても，彼女の場合，「認識の起こり」に欠かせない能力は唯一〈感受性〉であることを知るだけで十分なのである。

〔続〕

以下の註の番号が(93)から続くのは，本稿が前号『シモーヌ・ヴェーユとデカルト〔補Ⅲ①〕』の脱稿と同時に書かれたものであるからである。

註

(93) 紀要『シモーヌ・ヴェーユとデカルト〔補Ⅲ①〕』本文註(69)参照。それゆえシモーヌ・ド・ボーヴォワールとシモーヌ・ヴェーユという二人のシモーヌはともに，ソルボンヌ大学や本文に記した高等師範学校で学ぶことになる。そして『デカルトにおける科学と知覚』はもとより，ソルボンヌ大学に提出された学士論文となる。

(94) 筆者は，紀要『デカルトにおける理性と感覚(3)』（新潟大学人文学部人文科学研究，第99輯，1999年3月，P.P.40－45，P.P.48－51，P.P.56－58参照）にて，〈科学〉を，そ

の産出の原動力たり得る理性と，〈知覚〉を，その代表たる，理性(的認識)に素材を提供する感覚(や想像)と置換させ，両者の能力がかかわるか否かをもって生じよう，デカルトの認識論を問うてきた。なぜ認識論なのかは，シモーヌ・ヴェーユの場合，今回の拙論で諒解できるように，何より学士論文の第二部で，その感覚と理性の関係が主張されるからであり，デカルトの場合は，第一命題〈わたしは思惟する，それゆえにわたしは存在する〉と語られるように，認識論(思惟する)が存在論(存在する)より先きにくるからである。また筆者は，紀要『なぜ感受性なのか(3)』(同上，第94輯，1997年8月，P.21参照)や紀要『シモーヌ・ヴェーユとデカルト〔Ⅳ〕』(同上，第108輯，2002年3月，P.10参照)で，彼のいう〈知覚〉が何を意味させるかもすでに整理済みにしておいた。

(95) 本稿註(94)註欄参照。

(96) 紀要『シモーヌ・ヴェーユとデカルト〔補Ⅲ①〕』(新潟大学人文学部人文科学研究，第112輯，2003年8月)参照。

(97) 引用文中の後者の問題は本稿註(94)註欄参照。なおこの問題の証明は，のちの本文に詳細に記すところでもある。

(98) Simone WEIL《SCIENCE ET PERCEPTION DANS DESCARTES》P.49，Gallimard。

(99) 紀要『なぜ感受性なのか(2)』P.P.27－35(新潟大学人文学部人文科学研究，第93輯，1997年3月)参照。

(100) Simone WEIL《SCIENCE ET PERCEPTION DANS DESCARTES》p.11，Gallimard。

(101) たとえば紀要『シモーヌ・ヴェーユとデカルト〔補Ⅰ〕』とくに引用文⑤⑦と⑧(新潟大学人文学部人文科学研究，第110輯，2002年12月)参照。

(102) Simone WEIL《SCIENCE ET PERCEPTION DANS DESCARTES》P.13 Gallimard。

(103) Ibid ; P.12(2回使用される)。

(104) Ibid ; P.13

(105) Ibid ; P.17

(106) Ibid ; P.12

(107) Ibid ; P.P.11－12(De〈l'humanité a commencé, comme chaque homme commence, par ne posséder aucune connaissance, hors la conscience de soi et la perception du monde(個個の人間がそうであるのと同様に，人類はまず，自己意識と世界の知覚とを除いた，いかなる認識ももっていなかった)。〉. . . jusqu'à〈la pensée errante, livrée aux impressions des sens et des passions, n'était pas la pensée véritable(感覚と情念との印象に委ねられたとりとめのない思惟は真なる思惟でない)〉という序論冒頭の文章から上記箇所までにあって，〈真理の探求〉の〈思惟〉の多少の内容が示唆されると筆者はみる)参照。

(108) Ibid ; P.P.11－12(本稿註(107)の後者引用文)参照。

(109) Ibid ; P.12参照。

(110) Ibid ; P.29(PREMIÈRE PARTIE)参照。

(111) たとえば紀要『シモーヌ・ヴェーユとデカルト〔補Ⅰ〕』P.17引用文Ⓐ(この引用文は『なぜ感受性なのか(2)』P.28註(12)にも取り上げてある)，P.39引用文Ⓒ参照。また『なぜ感受性なのか(2)』P.29註(13)と註(14)参照。

(112) Simone WEIL 《SCIENCE ET PERCEPTION DANS DESCARTES》 P.21(PREMIÈRE PARTIE)参照。

(113) Ibid ; P.32参照。

(114) René DESCARTES《DISCOURS DE LA MÉTHODE》 P.P.137－138, Gallimard。

(115) Simone WEIL《SCIENCE ET PERCEPTION DANS DESCARTES》(PREMIÈRE PARTIE)(第一部内のP.21, 29, 36, 46に彼女の, デカルトからの転記の引用文ではない地の文として, 〈理性(raison)〉なる単語が散見する)参照。

(116) Ibid ; P.37(この頁に, 彼女の, デカルトからの転記の引用文ではない地の文として, 〈知性(intelligence)〉なる単語がある)参照。

(117) Ibid ; P.21(この頁に〈nos âmes〉と記される。〈âme〉の単語は第一部のここにはじめて出てくる。つまり序論にはないということになる。また第二部や結論の各部の〈âme〉に関しては本文のちを参照)。

(118) Ibid ; (シモーヌ・ヴェーユ自身が学士論文へ地の文として書き込む〈esprit〉は, P.20, 27, 29, 32(2回), 34, 36, 40, 43, 44(4回)に出ているし, デカルトの諸作品から取り上げる引用文中の〈esprit〉は, P.23, 26, 29, 32, 33, 37(2回), 38, 39(4回), 40, 42, 44, 45(3回)にわたって用いられる)参照。

(119) Ibid ; (第二部(49頁から95頁まで)のP.52, 62, 64, 70, 71, 72(2回), 73(3回), 75, 76(8回), 77(7回), 79, 81, 82, 86, 88, 89, 90(3回), 94, 95に, 〈esprit〉の 単語が散見する。これは第一部より数のうえで倍であるし, すべてシモーヌ・ヴェーユの地の文に見受けられる単語である。つまりこれは彼女が第二部ではデカルトの諸作品からの引用文を一度も持ち出さなかっことを意味させる。

(120) Ibid : (第一部では, P.19(3回), 20(2回), 21(2回), 22, 29, 39(2回), 40, 42(2回), 43の, 第二部では, P.71(3回), 72, 74(3回), 75, 77, 80, 81, 84, 86(2回), 92(2回), 93, 94に〈sens〉が記される。ちなみに〈sens〉は序論(11頁から17頁まで)では, p.12(4回), 14, 16, 17に出てくるが, 結論(96頁から99頁まで)では, 一度の使用さえない)。

(121) Ibid ; (第二部では, P.50(7回), 51(4回), 53(2回), 54(2回), 57, 58, 61, 62に〈sentiment〉が記される。ちなみに〈sentiment〉は序論と結論の各部では一度も使用されないし, 第一部(19頁から47頁まで)のP.20に2回出てくる〈sentiment〉はデカルトの『世界論(光論)』からの引用文中にある単語である。第二部は繰返してもいうが, デカルトにかぎると, 第一部に比べ, 彼の引用文の持ち出しのない, シモーヌ・ヴェーユだけによる文章で構成されることが特色である。むろんP.69の《Je pense, donc je suis》という, 周知の第一命題(cogito)が使われる箇所を除いてではあるが)。

(122) Ibid ; P.72(本稿註(117)註欄も)参照。

(123) Ibid ; P.P.73－74(本稿註(117)註欄も)参照。

(124) 身体の〈sens〉や〈âme〉の〈sentiment〉などを中心にした〈日常的用法〉の認識論については, 筆者はすでに, 紀要『シモーヌ・ヴェーユとデカルト』と題した〔Ⅱ〕から〔Ⅴ〕で大半を見終えているし, 〈日常的用法〉やその認識論がデカルトにあって成立するかは, 同『シモーヌ・ヴェーユとデカルト』の〔補Ⅱ〕でその証明を済ませている。ただし〈passion〉を含め, 取り残しておいた, 〈日常的用法〉の認識論に関する問題を,

前記した通り，次号以降の同〔Ⅵ〕で論じ，筆者なりに解決させる予定である。

(125) Simone WEIL《SCIENCE ET PERCEPTION DANS DESCARTES》(この学士論文中の〈sensation〉は，序論では1回(P.11)，第一部では3回(P.19，45(2))，第二部では17回(P.52，53，54，57，59(2)，60，63，79，82，83，85，89(3)，90，91)，結論では1回(P.98)にわたって使用される。注意すべきは第二部P.54を除いて，ほかの〈sensation〉はすべて，複数形表記であること，第二部に多く記されるということである)参照。

(126) Ibid；(この学士論文中の〈sensibilité〉は，第二部にのみ5回(P.71(2)，84，88，92)記される。ただし，P.84は〈sensibilité passive〉として使用されるし，この単語を含めて，すべて単数形表記である)参照。

(127) 紀要『シモーヌ・ヴェーユとデカルト〔Ⅱ〕』(たとえば「外的sens」や「内的sens」についてはp.86，「能動的sentiment」はP.80，P.87，「受動的sentiment」はP.81，など)参照。

(128) Simone WEIL《SCIENCE ET PERCEPTION DANS DESCARTES》 P.71参照。

(129) Ibid；P.90参照。

(130) André LALANDE《VOCABULAIRE TECHNIQUE ET CRITIQUE DE LA PHILOSOPHIE》P.P.976－980，Presses Universitaires de France，参照。

(131) たとえば，René DESCARTES《LES PRINCIPES DE LA PHILOSOPHIE》や《LES PASSIONS DE L'ÂME》を参照すると，前者のP.561，P.603(2回)に，後者のP.708，P.733(2回)，P.734(3回)，P.757，P.764，P.768，P.790に，〈affection〉の語が記される。

(132) Anne REYNAUD-GUÉRITHAULT《LEÇONS DE PHILOSOPHIE PAR Simone WEIL》 P.43，PLON，参照。

(133)『哲学講義』については，すでに紀要『シモーヌ・ヴェーユにおける感受性の基礎的研究の証明と展開』〔Ⅳ〕P.P.63－72で生徒アンヌ・レイノーが記録していた作品であることが紹介される。

(134) ほかの二度とは，紀要上記註(133)(P.68)と『なぜ感受性なのか(1)』(P.39)である。

(135) Anne REYNAUD-GUÉRITHAULT《LEÇONS DE PHILOSOPHIE PAR Simone WEIL》 P.240，PLON，参照。

(136) Rene DESCARTES《LES PRINCIPES DE LA PHILOSOPHIE》 P.572。また同様の主旨のものが，《DISCOURS DE LA MÉTHODE》 P.147や《MÉDITATIONS》P.268などに記される。

(137) Anne REYNAUD-GUÉRITHAULT《LEÇONS DE PHILOSOPHIE PAR Simone WEIL》 P.39，PLON，参照。

(138) 紀要『感受性試論』〔Ⅴ〕(「閾値」については，このP.7註(9)(またP.30註(9)註欄)，P.26註(51)(またP.P.33－34註(51)註欄)に記してある)参照。

(139) 筆者はシモーヌ・ヴェーユ研究にとって，〈感受性〉がキー・ワードになると認識し，これまでの諸紀要にて，〈感受性〉をこの〈量的である〉に結びつけるまでを検討してきた。既諸紀要とは，『感受性試論』(〔Ⅰ〕1986年，〔Ⅱ〕1987年，〔Ⅲ〕1988年，〔Ⅳ〕1989年，〔Ⅴ〕1990年，〔Ⅵ〕1991年)，『シモーヌ・ヴェーユにおける感受性の基礎的

研究の証明と展開』(〔序〕1993年6月，〔Ⅰ〕1993年12月，以上新潟大学教養部研究紀要，〔Ⅱ〕1994年9月，〔Ⅲ〕1994年12月，〔Ⅳ〕1996年3月)，『なぜ感受性なのか』((1)1996年8月，(2)1997年3月，(3)1997年8月，(4)1998年10月，以上新潟大学人文学部人文科学研究紀要)である。〈感受性〉は一方で，認識論的には，彼女のいう〈attention(注意力)〉につながり，他方で彼女のいう〈量子力学〉，〈波動力学〉，〈エントロピー〉，〈エネルギー〉などの諸概念に関係してくる(紀要『シモーヌ・ヴェーユにおける感受性の基礎的研究の証明と展開』〔Ⅱ〕P.94参照)とみるからして，これらが今後のさらなる研究課題になろう。

(140) Maurice MERLEAU-PONTY(1908年－1961年)のほかに，École normale supérieure(高等師範学校)での先輩ないしは同期生としては，Claude LÉVI-STRAUSSE, Simone de BEAUVOIR が，Simone WEIL 当時の大先輩には，Raymond ARON, Jean-Paul SARTRE などがいたであろう。

(141) Existentialisme(実存主義)との相違を打ち出すことも，註(139)註欄で記したことと同様，今後の研究課題になるからして，詳しくはその機会に譲らねばならぬにしても，筆者がここで，実存主義的な思想の持ち主の代表者の一人サルトルと比較してみれば，シモーヌ・ヴェーユとの違いは以下のところにもあるにちがいない。まず彼女がたびたび口にする〈矛盾〉を引き合いに出すと，彼は他の実存主義者とともに，〈矛盾〉を理性で何とか回避させようと試みるが，彼女の方は〈矛盾〉を〈感受性〉で受け入れ(次号以降参照)，注視(attention)していくしかなくなるのであり，これこそ真理に近づけさせると，そして彼のいう〈néant(無)〉では，彼は自分が〈無〉にならないために，たえず〈projet(投企)〉や〈engagement(参加)〉することを，彼女は自分が〈無(真空 vide)〉になることを主張するという点で，両者は異なってくるであろう。

(142) René DESCARTES《DISCOURS DE LA MÉTHODE》 P.130(〈insensibilité〉には「非(無)情」「冷淡さ」「無感覚」「無関心」などの意味がある)参照。